

黙示録21章9-27節 「子羊の妻なる都」

1A 神の栄光の装飾 9-21

1B 構造 9-14

2B 寸法 15-17

3B 材質 18-21

2A 過ぎ去った秩序 22-27

本文

黙示録 21 章を開いてください、私たちは前回から、主が私たちのために用意されている、天からの都、新しいエルサレムを見えています。すべてが新しくなった、という言葉、使徒パウロが、キリストを信じて、新しく造られた者に対して語った時に行った言葉ですが、その一新する御霊の働きは、終わりの日、新天新地において実現します。そして、神と永久に住む都を用意してくださいました。地上のエルサレムではなく、天からのエルサレムです。そして21章の後半において、この新しい都が、聖なる都であることを強調しています。清純な花嫁として描かれています。

1A 神の栄光の装飾 9-21

1B 構造 9-14

⁹ また、最後の七つの災害で満ちた、あの七つの鉢を持っていた七人の御使いの一人がやって来て、私に語りかけた。「ここに来なさい。あなたに子羊の妻である花嫁を見せましょう。」

天から下って来た新しいエルサレムについて、御座からの大きな声が、主ご自身がヨハネに語っていました。次に今、ここにあるように、「最後の七つの災害で満ちた、あの七つの鉢を持っていた七人の御使いの一人」がヨハネに語っています。主が、御使いに命じて行なわれた数々の災いがありましたが、最後に怒りが極まると宣言して、七つの鉢を地上にぶちまける災害があります。そして、大バビロンに対する神の裁きを、御使いが黙示録 17-18 章において、ヨハネに紹介しているのです。17 章 1 節に、こうあります。「また、七つの鉢を持つ七人の御使いの一人が来て、私に語りかけた。「ここに来なさい。大水の上に座している大淫婦に対するさばきを見せましょう。」

ここにおいて、大きな対比があるのです。この世における大きな都は、大淫婦であります。忌まわしい淫行を、世界の王たちと行っています。不正の富を築き、聖徒たちの血とイエスの証人たちの血で酔いしれている姿があります(5節)。多くの姦淫を犯している汚れた女に対して、ここでは、清純な花嫁、子羊の妻が描かれています。

都というのは、何なのでしょう？そこに、主権者である王が玉座に着いておられるところです。

そして、すべての民はそこに貢物を持ってきます。そして、王の統治によって、良い王であれば正義と平和が広がっている姿です。日本であれば、東京がまさにそうですね。天皇陛下に政治的権力はありませんが、象徴的な力があります。千代田線の二重橋駅から降りれば、そこに皇居があります。そして、霞が関駅を降りればそこに、行政の中心部があります。国会議事堂前を降りれば、そこに立法の中枢があります。この中心部があるからこそ、国全体が機能しています。私たちは、すべてが、この世にある国か、神の御国かのどちらかに属しています。それぞれに都があります、バビロンか、あるいは聖なる都エルサレムかのどちらかです。

主によって買い取られたイスラエルが、その都が荒れに荒れ果ててしまったことがあります。イスラエルが神に背いたため、神が、彼らが敵によって踏み荒らされるままに置かれたことがありました。しかし神はお見捨てにならず、彼女を取り戻すご計画を持っておられます。そのことを、凌辱された女から、再び主が取り戻し、清め、癒し、再びその栄光と美の飾りを付けてくださる話が、イザヤ書 54 章にあります。11-14 節を読みます、「11 苦しめられ、嵐にもてあそばれ、慰められなかった女よ。見よ。わたしはアンチモンであなたの石をおおい、サファイアであなたの基を定める。12 あなたの塔を紅玉にし、あなたの門をきらめく石にし、あなたの境をすべて宝石にする。13 あなたの子たちはみな、【主】によって教えられ、あなたの子たちには豊かな平安がある。14 あなたは義によって堅く立てられる。虐げから離れていよ。恐れることはない。恐怖から離れていよ。それが近づくことはない。」このように、神の義によってエルサレムが建て直される姿を、宝石によってその町を飾るようにしてくださる、となっています。

しみも汚れもない花嫁ということですが、男性は、ちょっと顔に傷があったところで、あまり気にしませんが、女性は、そこに一つの傷もしみも、汚れもあってほしくないと思います。そして、きめ細やかな身だしなみや化粧によって、ついにその美しさを夫になる新郎の前に見せるというのは、最高に幸せな時ではないでしょうか？また、男もそのような美しい花嫁を見ることを最高の喜びとします。霊的にこのことを考える時に、聖書ではそれを「恵み」と呼んでいます。恵みは、神の好意が一方的に向けられている姿です。そして、神の愛を感じることでできない部分は全くなく、神にすべてを任せきり、ゆだね切っている姿とも言えるでしょう。「この恵みのゆえに、あなたがたは信仰によって救われたのです。(エペソ 2:8)」

しかし、私たちは、その美しい、愛されている姿が汚されます。自分自身の罪のため、世の汚れのため、そして何よりも、悪魔からの罪の責め立てからです。しかし、新しいエルサレムにおいてはそうではありません。罪が取り除かれています。敵によって痛めつけられていた都が、宝石に飾られるように、神の恵みの栄光で輝くことができるのです。そこで決め手なのは、キリストの流された血であります。ヘブル書の著者は、12 章で、「あなたがたが近づいているのは、シオンの山、生ける神の都である天上のエルサレム」と言いました。そして、「さらに、新しい契約の仲介者イエス、それに、アベルの血よりもすぐれたことを語る、注ぎかけられたイエスの血です。(12:24)」と言っ

ています。私たちが、キリストの血が注がれているところに見えるものは、宝石の輝きに満ちている、美しい栄光の都、エルサレムです。

花嫁が、「子羊の妻」と御使いが言っていますね。ここには大きな違いがあります。結婚しようとしている女は花嫁ですが、結婚した時に妻になります。聖書では、男が女と一つになる時、つまり肉体的関係を持つ時、それが結婚をしたことになります。結婚が完成するのは、結婚式でもなく、披露宴でもなく、初めての夜です。パウロが、夫と妻に対して勧めを行なった時に、『『それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである。』この奥義は偉大です。私は、キリストと教会を指して言っているのです。(エペソ 5:32)』と言いました。この一つにされるということ、神と人が一つになるという、親密な交わりこそが、神が私たちに願っておられる究極の御心であるし、それが永遠のいのちと言ってよいでしょう。

¹⁰ そして御使いは御霊によって私を大きな高い山に連れて行き、聖なる都エルサレムが神のみもとから、天から降ってくるのを見せた。

御使いは、ヨハネを御霊によって連れて行っていますが、17章で大バビロンの時は、「荒野」に連れて行かれています。バビロンは、富や人間の欲望がたくさん詰まっているところかもしれませんが、そこには命の潤いがなく、また悪霊どもが棲むようなところですよ。

しかし、ここでは「大きな高い山」に連れて行かれています。主は、ご自分の計画の中で、高い山でご自分の力と栄光を表してこられました。シナイ山の麓に、イスラエルを集めて、ご自身の栄光を表されました。約束の地をモーセに見せる時は、ネボ山に連れて行かれました。イエス様がペテロとヨハネとヤコブにご自分の栄光をお見せになった時も、高い山に連れて行っておられました。そして、エゼキエルが地上の御国、千年王国における神殿を見せられた時にも、高い山に連れて行かれています。「神々しい幻のうちに私はイスラエルの地に連れて行かれ、非常に高い山の上に降ろされた。その南の方に、町のようなものが造られていた。(40:2)」そして、天のエルサレムも高い山にあります。

そして高い山だけでなく、聖なる都は天から降りて来るとあります。エルサレムは、地上のものではなく、天から降りて来るもの、天に属しているものであることを2節で学びました。私たちが御霊によって新しく生まれるのも、上から生まれると訳すことができるものです。私たちは、地上を見ず、上にあるものを求めなさいと、パウロはコロサイ書3章で話していました。

¹¹ 都には神の栄光があった。その輝きは最高の宝石に似ていて、透き通った碧玉のようであった。

聖なる都エルサレムの特徴は、「神の栄光」です。私たちは礼拝をしますが、神の栄光を仰ぎ見

るために捧げています。また全てのことを、神の栄光のために行ないます。その栄光が完全な形で輝いています。「最高の宝石」に似ているとあります。黙示録 4 章において、神の御座が宝石の輝きで輝いているのを見ます。「すると見よ。天に御座があり、その御座に着いている方がおられた。その方は碧玉や赤めのうのように見え、御座の周りには、エメラルドのように見える虹があった。(4:2-3)」エゼキエルが見た幻でも、主の御座がこのように輝いていました。「彼らの頭上、大空のはるか上の方は、サファイアのように見える王座に似たものがあり(1:26)」そして、シナイ山でも、そのふもとが「御足の下にはサファイアのような敷石のようなものがあり、透き通っていて大空そのものようであった。(出エジプト 24:10)」とあります。

私たちは、ここでいつも思い出さないといけないのは、「土の器の中の宝」だということです。「『闇の中から光が輝き出よ』と言われた神が、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせるために、私たちの心を照らしてくださいましたのです。私たちは、この宝を土の器の中に入れていきます。(2コリント 4:6-7)」私たちが、いつも信仰をもって、卑しいように見える姿、低められているように見える姿、情けないように見える姿、弱き姿、そういった土の器を見る時に、その中に、聖なる都エルサレムの輝きを持っているのだということでもあります。

そして、「透き通った碧玉」とありますが、これは後で見ると分かりますが、都の城壁が碧玉に似た輝きを持っているためです。そして都そのものは、ガラスのように透き通るほどの純金のような輝きを持っています。それで、透き通った碧玉のように見えます。

¹² 都には、大きな高い城壁があり、十二の門があった。門の上には十二人の御使いがいた。また、名前が刻まれていたが、それはイスラエルの子らの十二部族の名前であった。¹³ 東に三つの門、北に三つの門、南に三つの門、西に三つの門があった。

都には、「大きな高い城壁」があります。これは、都の特徴です、城壁に取り囲まれています。それはもちろん、外敵から守るためです。神の都においては、すべての者たちが入れるのではないことをここでは物語っています。神に敵対する要素、分子は全て排除され、ここで守られます。ここに入るということは、すなわち救いです。イエス様が、「狭き門から入りなさい」と言われたことです。

そして、その門ですが、ソロモンの神殿の時、レビ人が門衛を命じられましたが、礼拝者が汚れたままで入って来ることがないよう、外部からの汚れが入って来ることがないよう、監視しています。そして、無事に、安心して礼拝者が入って来られるように案内します。新しいエルサレムでは、御使い自身がその門衛の役割を果たします。

そしてその門ですが、「イスラエルの子らの十二部族の名前」が刻まれていて、かつ、東西南北にそれぞれ三つずつの門があります。ここから、聖なるエルサレムには教会だけが入るのではな

ということが分かります。新しいエルサレムは、イスラエルを通して入るのです。イスラエルを神は選ばれ、彼らによってご自身を現わしました。そしてイスラエルの民が最終的に救われ、その贖われた十二部族をもって、新しいエルサレムが完成するというか、成り立っていると言えます。ですから、私たちは今も、ユダヤ人がこの地上に生きており、しかも民として、国としてイスラエルも存在しているというのは、神の証しです。イスラエルは、異邦人の救いが完成してから、みな救われるとパウロはローマ 11 章で言いました。

東西南北の方向にそれぞれ三つずつの姿は、まさにイスラエルの荒野の旅における宿営の姿です。民数記にあります。幕屋を中心にして、東にはユダ、ゼブルン、イッサカル族が、西にはエフライム、マナセ、ベニヤミン族が宿営し、南はルベン、ガド、シメオン、そして北はダン、アシエル、ナフタリでした。黙示録 7 章で、患難時代の時に既に、14 万 4 千人のイスラエル十二部族が神のしもべとして、額にその印が押されていましたが、彼らは初穂であり、このようにして神の都の一部となります。

¹⁴ 都の城壁には十二の土台石があり、それには、子羊の十二使徒の、十二の名が刻まれていた。

イスラエルが都の城壁の門であれば、それを支える土台は教会だということです。旧約時代の預言者によってキリストが伝えられ、新約時代の使徒たちによってキリストが宣べ伝えられました。その預言者たちと使徒たちによって、教会が成り立っています。「使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられていて、キリスト・イエスご自身がその要の石です。(エペソ 2:20)」私たちがゆえに、教会として使徒たちの教えを堅く守っているのです。使徒 2 章には、教会が使徒の教えを堅く守って、祈って、パンを裂き、交わっていたとあります。それから、イスラエルの民も、どの時代の聖徒も、使徒の上に、すなわち、キリストという要石の上に建てられています。

2B 寸法 15-17

¹⁵ また、私に語りかけた御使いは、都とその門とその城壁とを測るために金の測り竿を持っていた。¹⁶ 都は四角形で、長さと同幅である。御使いがその竿で都を測ると、一万二千スタディオンであった。長さも幅も高さも同じである。

寸法を測るということは、御使いがエゼキエルに対しても、千年王国の神殿を測る時にそうしていました。そして、黙示録 11 章の患難時代の神殿において、外庭を測ってはいけない、そこは異邦人に任せられているからという言葉があります。測ることによって、そこが神の領域であり、聖なる場所であることを示しています。その寸法ですが、1スタディオンを 185 ㊦で計算すると 2220 ㊦になります。この体積は、ちょうど月と同じぐらいです。また、1 万 2 千という数字は統治を表しており、十二部族、十二使徒と並んで、神が治めておられる姿を示しています。

そして、「長さも幅も高さも同じである」とあります。つまり、立方体ということです。そこでこれは驚くべき形なのです。地上の幕屋において、またソロモンの神殿においても、神がおられる至聖所は立方体をしていました。昔は至聖所が垂れ幕で、聖所と仕切られており、さらに幕によって外庭と区切られ、外庭は掛け幕で外界と区別されていましたが、今は至聖所のみ、つまり神ご自身がおられるところ、その御座のあるところそのものが都となっているということです。つまり、神とキリストの中に私たちがすっぽり入るということです。聖なる方に少しでも近づけば、火もよって焼かれてしまうような汚れた存在です。しかし、キリストの血によって完全に清められ、神のご臨在そのものの中に入ることが許されているのです。今は霊的に、キリストの中に入ることができていますが、その救いが完成しているのです。主と共に住む、ということが完成しています。

¹⁷ また城壁を測ると、百四十四ペキスあった。これは人間の尺度であるが、御使いの尺度も同じであった。

1ペキスを44^サで計算すると、144ペキスは63.36^サです。そして、144という数字ですが、12を12で掛けたものです。これが城壁の高さであり、また厚みにもなっていたと考えられます。そして、14万4千のイスラエルの民、神の僕たちの数字にも出てきました。

3B 材質 18-21

そして次は、最高の宝石と先ほどヨハネが描写した、その宝石の材質について詳しく説明しています。

¹⁸ 都の城壁は碧玉で造られ、都は透き通ったガラスに似た純金でできていた。

「透き通ったガラスに似た純金」、つまり、全く混じりけがない、不純なものが入っていないということです。イエス様は、「心のきよい者は幸いです。その人は神を見るからです。」と言われ、パウロは福音宣教において、「私たちの勧めは、誤りから出ているものでも、不純な心から出ているものでもなく、だましごとでもありません。(1テサロニケ 2:3)」と言いました。神を見るというのに、純粹ということはとても大切な要素です。

¹⁹ 都の城壁の土台石はあらゆる宝石で飾られていた。第一の土台石は碧玉、第二はサファイア、第三はめのう、第四はエメラルド、²⁰ 第五は赤縞めのう、第六は赤めのう、第七は貴かんらん石、第八は緑柱石、第九はトパーズ、第十はひすい、第十一は青玉、第十二は紫水晶であった。

使徒たちの名が刻まれているその土台石は、それぞれが異なる宝石によって飾られていました。ここで聖書の翻訳によって、どの宝石なのか変わって来ますし、新改訳の第二版と2017を比べてもかなり変わっています。けれども、大事なものはその材質よりも輝きの色です。主のおられると

ころには、このような宝石の輝き、多彩な輝きに満ちているということです。主が、墮落する前のサタン、ケルブについて、このように言われています。「エゼキエル 28:13 あなたは神の園、エデンにいて、あらゆる宝石に取り囲まれていた。赤めのう、トパーズ、ダイヤモンド、緑柱石、縞めのう、碧玉、サファイア、トルコ石、エメラルド。あなたのタンバリンと笛は金で作られ、これらはあなたが創造された日に整えられた。」このように、主のそばにいたケルブが宝石で輝いていました。そして至聖所に入る大祭司の装束には、胸当てがあり、その胸当てに十二の宝石が埋め込まれていました。「出エジプト 28:17-20 その中に宝石をはめ込み四列にする。第一列は赤めのう、トパーズ、エメラルド。18 第二列はトルコ石、サファイア、ダイヤモンド。19 第三列はヒヤシンス石、めのう、紫水晶。20 第四列は緑柱石、縞めのう、碧玉。これらが金縁の細工の中にはめ込まれる。」

私たちが、大バビロンにあるような、この世における輝きの感わされることなく、絶えず、天のエルサレムの輝きに目を留めていきたいです。

²¹ 十二の門は十二の真珠であり、どの門もそれぞれ一つの真珠からできていた。都の大通りは純金で、透き通ったガラスのようであった。

真珠は、貴金属の中でも最高の高価なものとして、当時はみなされていました。マタイによる福音書 13 章で、その貴さが示されている譬えがあります。「13:45-46 また、天の御国は、良い真珠を捜している商人のようなものです。すばらしい値うちの真珠の一つ見つけた者は、行って持ち物を全部売り払ってそれを買ってしまいます。」神の都が、これだけ貴いもの、私たちにとってかけがえのないものです。

そして、「都の大通りは純金で、透き通ったガラスのようであった」とあります。先ほども出てきましたが、あまりにも混じりけがないので、ガラスのように透き通っています。そして次回読みますが、その大通りの中央に、いのちの水の川が流れています。この栄光のためであれば、この世の苦しみ、迫害、困難も由とします。モーセのことを思い出します。「彼は、キリストのゆえに受ける辱めを、エジプトの宝にまさる大きな富と考えました。それは、与えられる報いから目を離さなかったからでした。(ヘブル 11:26)」

2A 過ぎ去った秩序 22-27

そして、22 節から、今まであったもの、古い秩序にあったものを「見なかった」という表現で無くなっていることを説明しています。何が無くなっているかを見て行きましょう。

²² 私は、この都の中に神殿を見なかった。全能の神である主と子羊が、都の神殿だからである。

一つは、神殿がないということです。これは、驚くべきことです。先に話したように、神は聖なる方

であります。神は人と住まわれる所として神殿を与えられました。しかしそこには、必ず仕切りがあったのです。地上の幕屋には、掛け幕が外庭にありました。そして、東の幕の門からのみ入れました。そして祭壇でいけにえを献げ、祭司が青銅の洗盤で手足を洗います。そして聖所がありますが、そこにも幕があります。そして入って、右には臨在のパンの机、左に燭台があり、正面には、垂れ幕のところに香の壇がありました。そこを年に一度、大祭司のみが血を携えて、至聖所に入ります。ソロモンの神殿においても同じです。そして千年王国でさえ、そこには神殿があります。しかし、今、神殿そのものがないのです。それは、その住民がなんと、神と子羊ご自身の臨在の中に入っているからです！

²³ 都は、これを照らす太陽も月も必要としない。神の栄光が都を照らし、子羊が都のあかりだからである。

次に無いものは、太陽や月です。千年間のキリストの統治の時には、太陽も付きもあります。イザヤ書に、「30:26 主がその民の傷を包み、その打たれた傷をいやされる日に、月の光は日の光のようになり、日の光は七倍になって、七つの日の光のようになる。」とあります。しかし、イザヤは新しい天と新しい地における秩序も話しました。そこでは、太陽も月も照らさず、主ご自身が永遠の輝きとなると預言しています(60:19-20)。七倍の輝きになることも、あまりにも深い慰めですが、それを必要としなくなる、つまり、神と子羊の光そのものが都を照らしているので、その傷は全く取り去られます。

そもそもを考えてみましょう。神がはじめに、天地を造られた時のことです。第一日目に、光よあれと命じられ、光がありました。しかし第四日目に、太陽と月、星など光る物があるようにせよ、と言われました。では、第一日目の光は何だったのか？ということですが、それは神とキリストご自身の光、栄光の光だったのです。新しいエルサレムは、罪を犯す前のエデンの園のように戻す以上に、それよりもアップグレードした神の完全な世界、秩序だということです。

²⁴ 諸国の民は都の光によって歩み、地の王たちは自分たちの栄光を携えて来る。²⁵ 都の門は一日中、決して閉じられない。そこには夜がないからである。²⁶ こうして人々は、諸国の民の栄光と誉れとを都に携えて来ることになる。

次に無いものは、「夜」であります。夜、闇は使徒ヨハネが、福音書で語っているように、罪と不法、悪を象徴しています。「3:20 悪を行なう者はみな、光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光の方に来ない。」それが全くないので、夜もありません。ここで、非常に興味深いことがあります。創世記 1 章、そのはじまりには闇がありました。「地は茫漠として何もなく、闇が大水の面の上であり、神の霊がその水の面を動いていた。(2 節)」神の創造の働きにおいて、その前の姿には闇があったとのこと。闇であるところに、ご自分の光を照らされましたが、その闇そのも

のも無くしてしまわれたということです。黙示録 21 章は、創世記 1 章よりさらにアップグレードしているのです。

そして、諸国の民、また王たちが門から入ってきていると言っていますが、千年期の終わりにサタンが解き放たれて、多くの者を惑わしますが、その惑わしに乗らなかった人々であると考えられます。世界の人々が、自分たちの栄光を携えている姿は、イザヤの預言にも 60 章 10-11 節で話しています。これは、まさに礼拝の姿です。私たちが、すべてのことについて神に栄光を携えます。自分のしていることは、全て神から来たのであり、神に拠ってなり、神に至るということを認めます。

そしてここに、「一日中、決して閉じられない」ということは、当時を知る者は驚くべきことです。町というのは、城であり、城壁があり、城門がありました。夕暮れになったら、必ず戸は閉められました。敵が入って来るからです。そして門が閉じられて、そこに人が来ても絶対に開けたりしません。これが苛酷な当時の状況です。それがずっと開けられているということは、完全に安全になっているということです。私たちに、悪はもはや触れることはできないのです。悪に勝利しているのです！

²⁷ しかし、すべて汚れた者や、忌まわしいことや偽りを行う者は、決して都には入れない。入ることができるのは、子羊のいのちの書に名が書いてある者だけである。

最後に、新しいエルサレムで無いのは、汚れた者、忌まわしい者、偽りを行なう者です。「いのちの書」が、約束として何度となく黙示録に出てきたことを思い出してください、サルデイスにある教会に対して、イエス様は、「その者の名をいのちの書から決して消しはしない。(3:5)」と言われました。そして、いのちの書に名が記されていない者は、火と硫黄の池に投げ込まれることが 20 章 14 節に書いていました。子羊のいのちとありますから、イエス様によって命を得た者たちです。イエス様が、悪霊を追い出した弟子たちに対して、あなたの名が天に書き記されていることを喜びなさいと言われました。イエス様の名によって、命を得ているかどうか？が最も大事なことです。

そこで最後に、同じく黙示録の七つの教会の一つである、フィラデルフィアの教会への約束を眺めてみたいと思います。「わたしは、勝利を得る者を、わたしの神の神殿の柱とする。彼はもはや決して外に出て行くことはない。わたしは彼の上に、わたしの神の御名と、わたしの神の都、すなわち、わたしの神のもとを出て天から下って来る新しいエルサレムの名と、わたしの新しい名とを書き記す。(3:12)」これぞ、永遠の保障であります。主が永遠に、私たちをご自分の都の中で守り、ご自分の所有としておられるという約束です。自分自身には、このような保障は出てきません。いつ離れてしまうか、つまずいてしまうか分かりません。神の行なわれていること、恵みの中に生きることによって可能です。そのことに信仰を置くのです。